見聞録　6

bootleg-books

1

「ユウ」
「ん？」
十時休みの後。
八階に上がったコウイチと谷田の二人は幹線の準備をしていた。

幹線とは各階の電源回路を繋げるための主軸となる電線を通す作業のことである。
現在のマンション建築は必ずと言って良いほど、廊下に面した場所にガスのメーターを収納する場所が設けられている。
中にはガスメーターと元栓、またインターホン等の電源が収納されている。
その収納庫は『シャフト』言い、そのシャフトの一番奥には、各世帯の電源の供給の要となる電線が系統ごとに全フロアーを貫くようにして一回路として繋げられている。
使用される電線のサイズは世帯数で決まる。
この杉並の現場では一系統が八世帯なので使用される電線は三十八スケール。
親指程の太さの電線が三本に緑色のアース線を添えた計四本。
作業自体はこの電線を上層階から下層階に落としていくという単純なものだ。
しかし、非常に扱い難いだけでなく、重く長い電線を狭いシャフト内を通して行くことは容易ではない。
一度通した線はその重さのためにやり直しがきかず、ルートミス等のケアレスミス一つでも、最悪数百万の電線が全て廃棄となることも少なくない。
無論、高価な電線のため必要最低限の量しか搬入されておらず、廃棄処分となった場合には電気工事士がその電線を買い取り、再度発注しなければならない。
決して失敗は赦されないのだ。
幹線は熟練した技術が必要とされる、電気工事士に取っては非常に重要な作業の一つなのだ。

今回は全長百メートルを超える電線を計八本。
神経と体力を使う作業だ。
到底一日では出来る仕事の量ではない。

だが、コウイチは今日中に幹線を終わらせるつもりだった。

「何？」
「岡野君、何時に上がってくるかな？」
「…さあな。…ダウンライトって言っても数はかなりなモンだったからな……三時ぐらいじゃねぇのかな」
律儀に返事をしている谷田の顔を面白そうに眺めながらコウイチは笑って言った。
「そう？俺は結構早いと思うねー」
「何で？」
「ん？…アネキが手伝うから」
「…何で？」
シャフトの前に置かれた巨大なドラムには、黒々とした真新しい幹線用の電線が規則正しく巻付けられている。
イメージとしては直径が一メートルほどもある木製のボビンのようなものである。
そう思えば電線はボビンに巻付けられた糸にも見えなくもない。
コウイチは、シャフトに対して垂直にドラムを立てると、中央部分に開いている穴に単管（たんかん）と呼ばれる鉄パイプを差し込んだ。
コウイチの作業に合わせて、谷田は脚立をドラムの左右にしっかりと立てる。
「いくぞ」
「おう」
「せーの…っっ！！」
コウイチの掛け声に合わせて、二人は肩に単管を乗せるようにしながら一気にドラムを持ち上げた。
ドラムの重さは二百キロを超える。
二人は歯を食いしばり、慎重にドラムを宙に持ち上げながら、脚立の足に単管の両端を差し込んだ。
万一の間違いもあってはならない。
宙に浮かせた状態のドラムが落ちることの無いように、しっかりと確実に脚立の足に差し込んで固定した。
「…よし…っ」
ドラムがクルクルと回るのを確認してコウイチが満足そうに頷いた。
こうすると、ドラムの電線がホルダーにセットしたトイレットペーパーのように端を引っ張るだけでクセを作らず比較的少ない力で引っ張り出すことが出来るようになる。
セッティングとしては手間と力が必要なのであまり同じことをする電気工事士はいないのだが、この手間をかけることにより作業効率は飛躍的に向上させることが出来る。
腕には相当の自信のあるコウイチと谷田ならではの技だ。

しかしセットしなければならないドラムの数は全部で八つ。
最後の三つをセットする頃には、流石の二人も疲労に腕が震えていた。
「…ふぅっ。…あー…腕痛ぇ」
手を振り、揉みほぐすコウイチが一仕事終えたような顔で廊下に座り込んだ。
「…だな」
谷田はその隣りに腰を下ろした。
八階は廊下の全てを封鎖するような形でドラムがセットされている。
今日の幹線は組にも話がついているため、八階は今日一日終日電気屋以外立ち入り禁止となっている。
今日は誰の目も気にすることはない。
谷田はいつもの休憩の時よりも少し、コウイチの側に身体を寄せる。
「……へへ」
谷田の動きに気が付いたコウイチもいつもより随分と谷田の身体に自分の身体を密着させた。
「なぁ」
谷田は嬉しそうに身体をくっつけているコウイチの横顔を見ながら聞いた。
「何で、お姉さんが岡野さんの手伝いするんだ？」
「ん？」
コウイチが『そりゃぁ…』と言いかけて止める。
代わりに悪戯っぽく笑って素早く谷田に口付けた。
「…こーいうイケナイことして俺達が仕事サボったりしないように、早く監視役を送り込みたいから」
「……」
（確かに…）
谷田は思った。
コウイチの姉、恵美は、唯一コウイチと谷田の本当の『関係』を知っている。
気が付かれたのはもう何年も前のことだ。

『ね、アンタ達、嘘吐いてまで隠したいの？』

怒るでも無く。
問いつめるでもなく。
ただ、決して嘘を吐くことだけは赦されなかった。

「……そうか」
自分とコウイチとの仲を認めてもらえているのだろうか…。
今だ谷田には分からない。
恵美は是も非も唱えて来ないのだ。
しかしそれでもやはり自分の弟の恋人が男だと知って内心穏やかであるとは決して思えない。
谷田は、いつも飄々と構えているコウイチの姉がいつまで経っても苦手でならなかった。
「……」
「……ユウ？」
「……ん？」
「どうしたよ？」
「……別に」
「……」
「……」
「……。」
考え込むように黙り込んでしまった谷田に、コウイチは掛ける言葉が見付けられなくなってしまった。
「……」
「……」
「……」
「……っ…ごっ、ごめんっ」
真顔で謝って来たコウイチの方に顔を向けて谷田が不思議そうな顔をする。
「…なんだよ突然」
「ごめんっ。落ち込ませるつもりで言ったんじゃないんだ。ごめんっ」

「…別に…落ち込んでねぇけど？」
言いながら、繕ったように口元だけ笑ってみせる。
だがこんな時、コウイチは谷田の心の動きに対してひどく鋭く敏感になる。
「…からかうつもりで言った。…まさかこんなにアネキのこと気にしてたなんて思ってなかった。ごめん」
「別に、気にしてねぇよ」
「でも……」
子供のように眉尻を下げて頭を下げた。
「ごめん」
谷田は黙ってコウイチを引き寄せきつく抱き締めた。
一瞬だけ驚いたのが身体を固くしたコウイチも、直ぐにふっ…と、身体の力を抜いて、そのまま谷田に凭れ掛かった。
「……あったけー…」
「コウイチ…悪かった。俺が気にしてるからいけねぇんだよな。そうだよな。気にしてる場合じゃねぇよな」
「…うん…そうだ」
「…ダメなら攫うまでだ」
言いながら谷田は気付いた。
そうなのだ。
コウイチを好きなは事実なのだ。
曲げようのない、真実なのだ。
祝福されなかったから…と言って、諦められるような想いではないのだ。
何にも変えることの出来ない恋愛なのだ。
（…そう…そうだ…）
自分はコウイチを諦めることなど出来ないのだ。
コウイチは、何にも代えられないのだ。
谷田はコウイチを自分だけのものにしたいのだ。
なんと思われようと。
なんと言われようと。
もしも手に入れることが赦されないというのなら。
「攫うぞ…良いな」
タブーを犯しても構わない。
一瞬でも気弱になった自分が恥ずかしかった。
噛み締めるように念を押す。
「お前は俺のものだ。良いな」

「……おうっ」
嬉しそうなコウイチの声が、嬉しかった。

笑顔で見詰めるコウイチに顔を寄せ、もう一度ゆっくりと唇を重ねた。

「……ユウ…」
顔を離すと、少し困ったような表情のコウイチが小さな声で谷田の名前を呼んだ。
「…ん？」
「……なんか……俺……今…したいかも」
言いながら、自分のにズボンのジッパーの辺りを右手の指で軽く引っ掻く。
「…んっ……へへ…っ……あ……ホント…マジでやろうよ…」
そのまま緩く足を開いた。
ズボンの上からしっかりと自分を掴み、ゆるゆると腰を揺らしながら揉みしだく。
「……ばっ…コウイチ…」

現場は、例えばマンションのように世帯数が多くなればなるほど建物全体が巨大な迷路の様相を呈してくる。
職人達はそれぞれがバラバラに現場内に散らばっているので、部屋内ではち合わせることは滅多に無い。
九十一世帯のこの現場は規模としてはそう大きくはないが、小規模という訳でもない。
それなりに大人数の職人が働いてはいるが出会うことは一日数回程度に過ぎない。
まして今日はこのフロアーは電気屋以外の職人は立ち入り禁止だ。
突然『スイッチ』が入ったコウイチが誘うように腰を揺らす。
「……いつもより時間掛けられそーだし」
誘ったのはユウだからな…と、空いている手で谷田の頬をさわ…っと撫でた。
意外に感じるかもしれないが。
現場でのセックスは、思われているよりも頻繁に行なわれている行為の一つだ。
別に珍しい話でも何でも無いのだ。
そして当たり前かもしれないが、現場でのセックスは男同士の濃厚なものが非常に、多い。
水面下で。噂のように。
しかし、それらは『真実』なのだ。

見聞録　6

http://p.booklog.jp/book/38099

著者 : bootleg-books
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/bootleg-books/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/38099

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/38099

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.